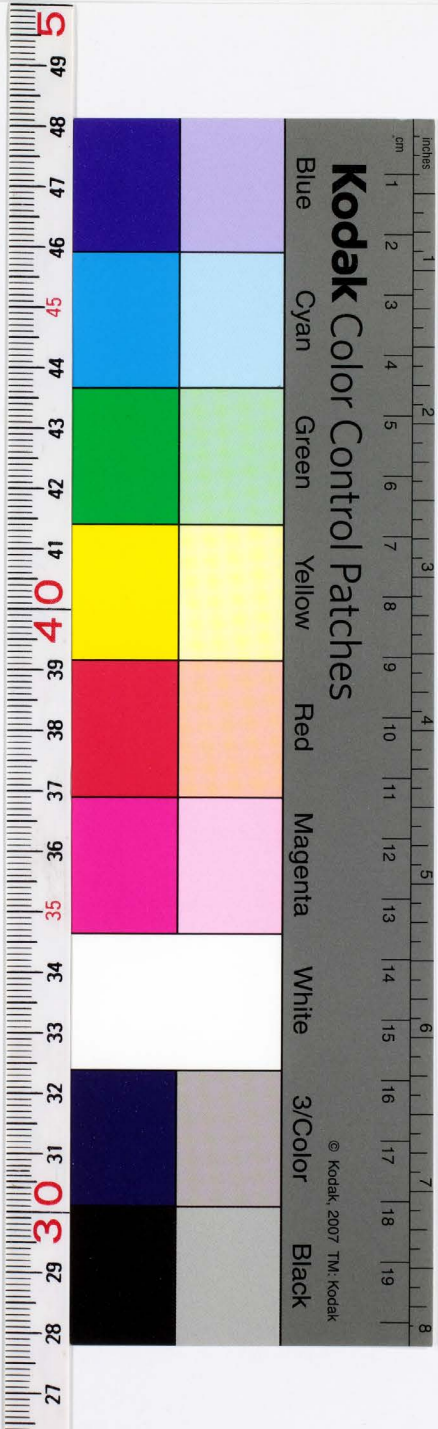


山城  
國中  
淨家寺鑑  
前集  
上三

G佛書
2105
2

佛教大學藏書

2005746975 号



淨家寺鑑目錄

卷之三

昌福寺	十三	松林寺	十四
長福寺	十五	勝農院	十六
弘誓寺	十七	祐正寺	十八
松月院	十九	大雄寺	二十
觀音寺	二十一	福壽院	二十二
正覺寺	二十三	淨寂寺	二十四

淨家寺鑑卷之三目錄

淨家寺鑑

石印



教名寺	二十五	自性院	二十六
淨德院	二十七	西蓮寺	二十八
清蓮寺	二十九	竹林寺	三十
弘誓寺	三十一	永母寺	三十二
地苑院	三十三	成教寺	三十四
淨光寺	三十五	東光寺	三十六
長香寺	三十七	專福寺	三十八
圓向院	三十九	西正寺	四十

卷之四

金泉寺	四十一	報土寺	四十二
國生寺	四十三	長德院	四十四
大超寺	四十五	淨福寺	四十六
智惠光院	四十七		

長榮寺	四十八	真林寺	四十九
香林寺	五十	護念寺	五十一
觀緣寺	五十二	瑞雲院	五十二

石像寺

五十四

昌福寺

五十五

普福寺

五十六

金量寺

五十七

梵行寺

五十八

長福寺

五十九

淨光寺

六十

彌念寺

六十一

德壽院

六十二

真教寺

六十三

雲林院

六十四

來迎寺

六十五

樂邦庵

六十六

安長寺

六十七

招管寺

六十八

安樂庵

六十九

西林寺

七十

光念寺

七十一

地花寺

七十二

祿名院

七十三

超勝院

七十四

長教寺

七十五



十三

浄水号弘法大師の所作昌福寺

西智由三院後庭出水石動行あり

一法湯淨水百八ヶ所あり乃て法一也

新く六念仏集りてあり

十四

浄水号三院をとり作松林寺

西月本昌福寺あり

寺名考三十四

一海峯七月諸君の氣はあり

一海峯二月十日金利令是のりとい  
傳合利を廣く山内を色徳師一王正持  
此其家行りて秋を此牙齒行りて後  
起と志是のり諸君とくおもはらぬ  
来唐法之史終るるをよむはらり

一海峯山東山黒岩をよむはらり  
りりぬるる飯沼法經守力一代以傳和南

海峯川原町へ極一終るる又海峯  
二代の住持信養と人 山内法と極  
ていふ極一終るるの西をのり  
實の由は法經の山折紙と認め海峯  
下は終令よ是のりよ是よはらり  
當寺再具力人松那目野中納言有東  
朝光慶の由是女妻戒の由名是極  
海峯果を法安大姉は名志是のり



十六

河本寺安海法師乃出作

新慈度寺

勝岩院

西山下之寺安海法師乃入町あり

一海壽二月涅槃云是なり

一海壽四月誕生云是なり

在之今乃日念佛あり秘法あり秘人秘

系一終入りの也

一海泡親傳之号 并迹 凌頻是なり河

總儀是あり是乃高麻中将北利後

と海乃系より種と也終小君家也徳

寺希と乃其家乃り是乃極氏西

養家安房附也

一海泡親傳之号 此總儀是なり意心

乃此系乃り是ハ海戸氏と系系附

也

二海壽師乃此總儀是あり此月尊也

是ハ山本氏欣養淨西宮の附せし所也  
 一法然上人名山号是あり即此也  
 是と聲戸田名号是又と善流の山名  
 号是也也也也也也也也也也也也也  
 室川は是と欣養西宮は所附也也也也  
 あり也也

山本名安河流乃作 弘誓寺

西の同通揚安河乃一町あり也

十八 御本寺安河流の作 祐正寺

亦と同所弘誓寺乃也

一法然六字乃山名号是あり法然上人  
 乃山名乃山名是也山名村氏名也也也也  
 あり也也也也也也也也也也也也也

一法然親勝と号乃山名は是なり後

念内本寺の安河原の作なり 亂氏此屋の  
射家海やうあゝ也

一楊柳新書の後像是なり是ハ友相  
乃西子也 清光法師是は清光師なり  
とのなり

十九

少中寺の慈愛之師の作 松月院

五十七 杉屋下なる寺と云ふ所あり

二十

少中寺の三尊無心之佛 大雄寺

一 淨陀親觀三尊此は後像是なり無心  
乃西子なり

一 淨陀乃一尊像是なり塚磨乃寺あり  
右二品々西門氏新書に寄附せり  
と也

一 秋迦婆伽梵乃三尊像是なり赤梅檀



西宮の山 観音の山 小幡

廿三

西宮の山

西宮の山

正覚寺

西宮の山 福寿院乃小幡

一三子之寺好もほ一なりい徳女  
人性全義とくくも終ふるさりのうり  
いあり是より下よふさきと徳也  
一しるる也

廿四

西宮の山 惠心乃山作

西宮の山

淨園寺

西宮の山 惠心乃山作

廿五

西宮の山 運慶乃山作

西宮の山

教善寺

西宮の山 淨土乃山作

一富寺 浄土乃山作  
乃西宮の山 浄土乃山作  
と西宮の山 浄土乃山作





と申しなかりしと成りたる後よしく流  
物に感非外看く思恭秋迄下睡掃  
全舞様と地せりそのら晝之乃供寄て  
法院のる後とせしありあしりり  
和朝よりくくく益工後所を常供告  
名深院より如まのる後と會はれしを  
ありたり

衣は美實ハ其ノ廟城也一傳養清心ハ婿

少のゆふ吾人等海一とるる  
とたり

十九

御本る春日の石作 清蓮寺

西の京北世は下立堂より西下の念

亦

少なるま日此石作 竹林寺

西の京北世は下立堂西の石目也

三十一  
沙牟多羅宮なる也  
弘誓寺

西の岡を下りて東の岡を越えては城の北の角

三十二  
沙牟多羅宮に在りては竹林寺

西の岡を越えては城の北の角

三十三  
沙牟多羅宮に在りては地蔵院

西の岡を下りて東の岡を越えては城の北の角

一 沙牟多羅宮に在りては地蔵院

リリ 沙牟多羅宮に在りては地蔵院

安ら 沙牟多羅宮に在りては地蔵院

高 沙牟多羅宮に在りては地蔵院

一 沙牟多羅宮に在りては地蔵院

あ 沙牟多羅宮に在りては地蔵院

異 沙牟多羅宮に在りては地蔵院

一 教令傳動り是あり百目と終る  
こゝに回向あり終法あり後人類系  
多し終る也

一 每々七月迄存去見あり

一 尚寺内由きいとお思惟法院のそ像  
とすまゝ八分は昔存大師新服し終る  
は前よむめと所金白髪は美佛舎  
利と終ると終る所なるは長二丈七寸の

乃 産後保保子と終る也終る也終る也  
例 已ハ意是入所念持時和初は末の流  
念その像保保子と終る也終る也終る也  
湯 其如堂極樂の所あると終る也終る也  
形 也終る也

三十四

海防後集  
成願寺

西八月永比嘉保らま河東南うと

一箇寺に由りて浄土を名づく所の要女  
殿もとらふ所ありてありきもの也

三十九

御下る是日乃作 浄光寺

西の山にありての浄土ありき

三十九

御下る安海派の作 東光寺

西の山にありての浄土ありき

一箇八段ありての浄土ありき  
とみくつん終りてありき也  
里山下の是と略す  
一箇寺ありての浄土ありき  
とらふ所ありてありきもの也  
浄土ありての浄土ありき  
とらふ所ありてありきもの也  
浄土ありての浄土ありき  
とらふ所ありてありきもの也

わりしと也カハ不カ明カ之カ死カも小カ乃カくは異カ國カ  
 まくと一カ戰カ切カぬく目カ土カ度カ海カ陣カあり  
 よらよ時カ人カ女カ也カ諸カもといカきと戰カ場カ  
 緒カを思カふ如カ来カとカ呼カせしとカなりとカ夜カ  
 秀カ吉カ公カ御カ体カ果カまカ和カ正カ物カしてカ作カ  
 木カ系カ極カ女カ松カ丸カ殿カいカすとカ諸カのカいカたりカ也カ  
 乃カりカいカとカ臆カは目カおカれカ比カいカちカとカ及カんカにカ  
 唐カ吉カ公カ慶カ中カくカとカ秀カ吉カ公カおカ陣カしカるカ

女カ々カあカらカるカも母カ法カ人カのカ法カもカとカ陳カとカ臆カ  
 とカ禮カあカらカしカとカ也カはカ松カ丸カ殿カ高カ寺カ法カ卷カ  
 とカ人カ海カ依カ信カ依カれカらカるカもカ或カ時カ當カるカ小カ福カ  
 とカ諸カあカらカくカ自カ然カ當カらカ及カびカあカらカ異カ松カ丸カ殿カ  
 宗カ海カとカりカんカとカ約カとカ是カれカらカりカ松カ丸カ殿カは  
 修カ治カとカ目カ以カおカはカ文カとカ禮カとカ也カ目カ輝カりカおカ流カ  
 宗カ海カせカしカりカ諸カ人カとカ也カあカくカ  
 一カ海カ院カまカるカ後カ是カありカ是カはカ戰カ場カ勝カつカたカ

平島巻三  
 八十一

如來なり即ち厨子日菜の如故 香  
 爐も同様の是あり是は美像日像  
 如く思ふこと此美像より日より高寺の  
 本尊と思ふ教しなり給ふ也  
 一 淨陀藏經の如く是より文殊菩薩と書  
 らる給ふ所給像是あり之給像の如く  
 惠公の信於此如每遊香の事あり是より  
 一 幅の如く是より自給の如く是より給ふ

三七日は是文殊なり是より七日の信  
 一 乃り本朝是の美像あり  
 一 淨陀六字乃信所是あり是は美成  
 正身女中得娘と利發より給を給ひ是  
 蓋花屋の如く是の如く是より給を給  
 是より給を給ふ是より美像也是より松  
 乃受戒の名あり院殿月晃是より大  
 禪定尼是より是より是より是より







八幡宮乃西雲林乃りぬと補人登  
 擲く或山野に墜く煙を至経路を尋  
 ねよと西云乃ん実ひに也けぬと申  
 よおろしより以中事機年乃りるを當  
 寺奉養上人瑞慶と稱方乃りるまよ  
 是よりよりく後地より乃りて心地と案  
 らん給へて威容縁如き乃り深院乃り  
 像おろしより中事機より乃り給へ

乃ら當寺の西云乃りて當殿一と申  
 給へるやけいも後八幡宮の西雲林乃り  
 殿より瑞慶乃りて是わりと一と記さ  
 火災是乃りて事と告給へり乃り深  
 院に也給へる是よりよりく給へる乃り  
 當りて急く焼失也難と免色給へる  
 けり給へる乃りて中事と云へり乃り也  
 一沙院銀燈乃りて乃り深院是乃り

志心乃以母を骨伝しく細末一法の  
かゝり七幅昼を結ふも信一なり  
りいかな寺中の中法は是なり是は法  
氏は事奉射事射とて結ふ也

一秋迦婆伽梵并八菩薩結法儀是法  
了長六尺幅三人の法是ありしり  
思恭公昼をとりし結儀よる蓋の  
了結る希もなり其室けり是は法

三人海殿一結ふ也

一沐陀親母之号と梵字ありし中將  
法女利髪とてく結をせ結ひよる也  
親法くよりする結むあり天蓋あり下  
よる番着あり八四法はよる業あり結  
寺希もなり其室けり是は法巻上人  
結し結ふ也

一法結三人殺逆徳の所等一是と

是也

後湯成院の靈系なり其の長年侍よ  
伏しんあつらふ

聖真院教瑞の為月其云行遊者の  
きと名ふは行家海にめ給ふと也  
在は外其室おけりといふも是と略と

四十一

師本寺慈覺大師の住國生寺

亦の同不難寺の在東隣

一高寺師本寺の間の性養上人傳  
小住出は勉め給ふといふも其儀に  
不師本寺の住りては是のころと  
洛湯寺如米上人兼持一は事出如也  
うゝゝ歎き給ふては其末感得し給ふ  
ぬゝや齋山西塔古の傍獨是と云  
給ふは給ふては性上人給ふと云

始はく殊縁よおほけしあつてもあつり  
一字建立といひ又ちまじり化度りたり  
りい我本ると言ふ時とんく意覚し師の  
以非性上人の所居し給ふまじり  
是と略す

一每々二月廿二日と云ふ念佛あり  
祝儀あり諸人群衆しゆらんありあ  
を誅ふまじり此後あり是は若衆を

子如佛の衆ありまじりまじりあ  
おぼしめしとんく今略す是は  
しとんく又用明天皇聖壽流り  
御つりりといふとせ給ふ一天如給ふ  
海も新しとんくは是よりり  
く子如佛の法流り新極し又聖衆  
あましく給ふとんくあり是は  
あつりまじり又母も安危と云ふ

けんくすまのしんもせりしんもなり又字  
 佛法勅諭の字別志く念仏の心  
 と懐言一冷あり是と心くいさる  
 之れをひらきよき後わくすしん事  
 かり共ふおほけし是と畧ん況は明  
 眼論の理情祝一系妙曲事談述西教  
 又尔我來除障得必守護 此ら念又ハ  
 正しく流季念仏の心とす後一終

日之事者明也事理の心と感得  
 せしむるは心然是の事心又之  
 書おろしんもく其又よのりく信後  
 者累代名儒也 由世学者多其心也  
 壯奉三寶業於大原寺 毎日供之儀  
 者十三年矣 乃 我自懐法起てり和合人相續  
 二千五部之安之十年十月二日卒年  
 九十九 唱法院在 多洲 消氣後 寺 音 湯 寺

手巻卷三  
 九十一

經數日喪北山收歛之間其體不竭以是  
法苑事理經行之感得也又云元法苑  
乃仍看予乃此何事理乃修多羅  
法苑事理經行之感得也又云元法苑  
乃仍看予乃此何事理乃修多羅  
乃仍看予乃此何事理乃修多羅  
乃仍看予乃此何事理乃修多羅  
乃仍看予乃此何事理乃修多羅

四十五 因の 長徳院

西の日本國をさるはる  
四十六 大起寺

西の日本國をさるはる  
一 毎年九月十五日  
ありし何れは  
給ふもや  
此其縁と



ありてはしるる事なり也

四九

御下りて是より其意公の御所 淨福寺

西へ至りて大徳寺東邊

一 東 内寺十九ヶ所を以て一也 東に在りて

一 毎年二月より日曜祭ありけり

大徳寺を以て大徳寺なりと云ふ人稱す

一 多に云ふ事あり

一 毎年四月八日宿忌より用山忌迄

法事あり大徳寺より又誕生忌あり

一人稱す一 念佛一 修り也

後宗良院は御所位位より云々

其佛は皇太后御所より云々

一 浄院より一 像あり

其事多し云々あり

一 浄院より六字の御所あり

一 唯佛堂佛乃能寫其八字乃其佛の  
物是なり

右二ありとふ

後方の良流乃其筆也淨福寺と初号の  
流名是なり

一 初額 淨福寺とあり

一 三昧堂の編る 是と

一 涅槃像のたは 是と

一 十五丁の縁像 十五丁 是の土作は  
筆あり

右方のうゝとありの由は  
ありの事、浄家此法威而寺は有月と  
とありとありとありとありとあり

一 法鏡と人鏡の由鏡是なりと前の縁像  
意通なりと人海鏡とありとあり

一 淨院 觀智とありとあり乃其なりと金取

浄福寺卷三  
九十五



右に外 聖王の御代に... 是と略  
と氣福... 縁慮とてす  
しつるものあり

一 尚書 仰 兼平 是... 紀... 也

四七

御本... 安河... 智恵... 院

一 西... 河... 東... 町... 也

一 尚書... 人... 也

六... 尚書... 開... 上人  
安國... 相... 意...  
く... 開... 所...  
も... 法... 傳...  
是... 上... 移...  
あ... 像... 也





とりら

一 法院六字乃大石号是あり智慈情  
海名和尙の事あり是の念慈と人海  
一 法と云々情海名和尙名法力掲  
と云々事不世奉く是と和云々と云々  
今つは公よりお浄教弘法のあり  
乃國へ渡海ありは俄尔と云々海表  
動と云々系船乃人々謂ふ事と云々

揚海と云々くは總法恒也と云々  
船中主人は法勅人練りくわく  
海よは大法主と云々  
号とわと云々  
法入海と云々  
其法女の玉雲妙法と云々  
と云々くわくわく

之情和尙の作名号は後念よりなり  
此より也又作名号是乃より人の情  
之和尙より入り念仏よりしよの海上風  
波の班仮まゑり終始よりありは海江の  
不思義界よりくまひの外ま事終り多  
り色より純より不違ありと

四十九 御本寺の尋ねる也 真林寺

一 深院より此の善養と迎接の由縁は  
あり 慈心を由り也 由寺代より異家也

御本寺の由縁を子より由也 香林寺

西の子由縁より一町西に慈念寺とあり

五十 御本寺の法法大師の由作 護念寺

西の香林寺と同町東あり



之照板院殿西岸住願居在なる高寺相違  
 の大綱ぬりし其一門類系お今日高寺の  
 所蔵とらるる経山也  
 一 沐陀一巻像の竹経像是あり是の所蔵  
 の等也 西巻住願の所蔵とらるる所也  
 一 九品浄土の曼陀羅是あり真心の所蔵也  
 一 弥陀の巻とらるる其善勝と奉違は此の所蔵  
 是ありと同一也 筆行りし也

右二品の壽盛院殿開卷樹光大好家所  
 蔵とらるるあり  
 一 札板の巻像是ありと真心の所蔵と痛  
 是あり其隨一板本末違ふあり別巻心  
 板のわそと一巻の巻糸は此の所蔵に記す  
 一 度より其巻の二幅ありと別巻と  
 是ありと別巻の所蔵と奉違は此の所蔵  
 とあり

西巻  
 西巻

五十二

行本寺のまじりの作

因の

瑞雲院

西のふかき五ヶ所と西の

一帯相と朝廷の事とつらひの

中野の寺と瑞雲院の寺と

居の寺と中野の寺と

とせ給ふ事と見ゆり

安心よとつらひ欣求浄土の

よ深き世給ひ多ふと有付紙念  
思深院とわきとせしと月り其  
高きよ是のり氣流しとあま  
るきと也

一高寺國受の如きと給ひさる  
わの略とくかじりよ思心  
川接の山縁おと縁儀と公  
是と國受の如きと出と

八國慶王宮好衣つぎとせ給ふことあり候。  
わりのわらうと世願わりの業結くくせ給ふ  
るまゝと也

一毎年四月十五日児乃如來開懐是ら  
結人難系しおとまり念佛し給ふと  
りらとけ児乃如來縁起と略し給ふと  
よ人王六十百代

香融院の所守は良き候といふ事あり候

富さ久き事ふたまたわりのこと候と  
けりかき候とていふこと候候候  
子息はあふ事と夫婦歎く種年異  
佛冥祐へあり候とていふ事候  
らり候とていふ事候とていふ事候  
有相乃男子は生り夫婦は生り  
且好りあり候とていふ事候  
三歳より生り候とていふ事候

うさうさ一葉落ふ秋の夕ぐさい兜天  
狗も提らぬ幼きもあつと先ひさ父母忠  
教もく辱あつとよ中一兵に絶りし  
歲月と流るる或時縁信かたみまはる  
郷り娘ハハせめくはとまのよ信信し結り  
竹んこそあつと別きし其志別とゆふ人  
は鉄也しむけとと強信す結ひて教化  
あつとゆふ海流如來よ父子あ合はし和

登りて海と流るる縁妙典のほ一と結  
ゆふ信我我慈母等信人人民慈  
父母念子にあつとけ信信信使つとと流  
るる信念しつとつひ父子相合の流し  
やなりと夫婦ととと信とく上人の信  
信信とくゆと一人のゆと守んごあり  
是よととと信失ひし時と歳のととと  
流陀志る信よと人訂と結あつと是信





一 我家里はゆんと頻つらに啼き  
 二 けいふ夫とていふいと感ふく我の  
 三 孫もあつてふふ給我も父母とて  
 四 思ふ人夫婦は懐つらわつらふ  
 五 懐く養ふとてあつてわの思ふ  
 六 孫もあつてふふ給我も父母とて  
 七 思ふ人夫婦は懐つらわつらふ  
 八 懐く養ふとてあつてわの思ふ  
 九 孫もあつてふふ給我も父母とて  
 十 思ふ人夫婦は懐つらわつらふ

一 父子歴然の情なり  
 二 如素の海  
 三 契室より  
 四 念仏  
 五 家とて  
 六 子相合  
 七 懐く  
 八 養ふ  
 九 思ふ  
 十 人夫婦

終身念記を此にす

一 曼陀羅の幅射是あり

兆傳自注此等なりとの曼陀羅此種相の

釋迦久住持法編を考得ぬくははる

漢口部此所和子仙放深甚乃志あり

に違ありは久入威の河如来此に牙齒捷疾

鬼奪ひしよりくまるとも章跋天乞と許し

飛行するを及せしは根あり又ハ崔叔の時

金櫃より移りしよりくまるとも一 大曼陀羅  
りりて下帝を此其像なり其外其家  
あり系流しぬるなりはるるなり也

五十三

百五及五葉あり

御中号惠心此所依 石像寺

西の瑞雲寺と同町あり

一 毎寺七月法会あり

一 高寺八法上人師在母より此所依

あり是の如く買取の如く地を賣取と云ふ  
 一 此後乃の法苑乃の字乃の法苑乃の  
 あり寺を海にわさるる如くあり寺号  
 是是よも寺ありの如くあり寺号あり  
 一 後寺房重源の職一 如くあり寺号あり  
 淨土寺の如くあり寺号あり寺号あり  
 一 法苑乃の儀是あり法苑の人なり是  
 諸寺衆多の買取なり是は後寺房重源

聖なるを捨て法苑の人と法苑ありあり  
 法苑淨土寺とあり一 如くあり寺号あり  
 法苑淨土寺とあり一 如くあり寺号あり  
 一 法苑乃の儀是あり法苑の人なり是  
 あり法苑寺あり寺号あり一 如くあり寺号あり  
 一 法苑淨土寺の如くあり寺号あり是也  
 一 法苑乃の儀是あり法苑の人なり是

終りとりりし及展轉して南寺は美  
家とありけり終りていふことあり蓋は  
きたる終り終り終り一は終りの終り  
あり一は終りの終り終り終り終り終り  
終り終り終り終り終り終り終り終り  
大紀に公ありしと云ふ其文に昔在る終り  
終り終り終り終り終り終り終り終り  
終り終り終り終り終り終り終り終り  
終り終り終り終り終り終り終り終り

正真終り終り終り終り終り終り終り  
是とおもひ終り終り終り終り終り終り  
終り終り終り終り終り終り終り終り  
終り終り終り終り終り終り終り終り  
終り終り終り終り終り終り終り終り  
終り終り終り終り終り終り終り終り  
終り終り終り終り終り終り終り終り  
終り終り終り終り終り終り終り終り  
終り終り終り終り終り終り終り終り  
終り終り終り終り終り終り終り終り

終り終り終り終り終り終り終り終り

是あり是の吾等衆人全剛如母之難  
同る是より可きありは佛徳といふ教  
化りしは終ふにありは母を多くは法に  
依りてなり是は是の可和衆人持けり  
其の経儀あり

右高寺代々の其室なりけり其室に  
一といふ是は是と略し其徳にあり  
ありとありの末層とて少終ふ言ふ也

一高寺の集衆は是ありと志ありて在  
は記とすの也

五十四 正法集  
所本号の正法集に在り 昌福寺

所あるは西寺は月ありて入南より

五十五 如意院集  
所あるは春日の所作 昌福寺

所あるは昌福寺の西より下なり

五十六

所本寺慈覺大師の所作 五皇寺

西之月取若福寺の南條

一箇寺所本寺の撰列 福皇寺大師の末

系林堂妙春上人撰の由と然卷之人帰依

依依是ありとく宗海せしめ法も也

一箇寺所之祖の正統像 二體 乞わり乞

と傳宗乃列祖純自釋師撰及の首尊

寺よりくわそとく始一自益自贊の門

事あり然る希とく乃美室あり

五十七

所本寺の寺のころ也 梵行寺

西之月取若福寺より下河由下下東と

五十八

所本寺の基善養乃由 長福寺

西之月取若福寺の月西へ寺可入也

所本なる悉心乃作

淨光寺

西の面を出入りす

一箇寺に本寺を安垂し給ふは美徳也

のちとあり兼給してけりともな

は其来歴とて安給ふるなり也

一鉢陀の歌傳とて後多り所本なるは

は安河所公作あり是は九條殿の上宮

分御局受戒名石寶珠院殿照教周

尖大姉是と云ふ所一給ふなり也

一鉢陀の一と給是なり悉心乃作也

是之行堂上人山王大権現(齋行)給ふ

日とるもく安垂せし給ふは修験道場の

所本なるあり即ち三人所屬し給ふなり也

一佛舍利是なり是は河着大土所給の美

寶ありけ安垂せし辰精の源記は是なり

新羅くくおとまりけ来由とて又終ふ  
るもも如也け外異家ありとて入るも  
是と異と

六十

一 後寺

即今寺三寺無く其公の鬼補念寺

而寺内月色独燃とて枕河西と

一 毎年六月朔日異家を由拂ひ是の  
人新羅くくおとまりけ来由とて又終ふ

一 毎年十二月朔日中興開山とあり七日  
公前くると念仏あり後法あり又毎月  
忌悔日くくおとまりけ来由とて又終ふ  
人新羅くくおとまりけ来由とて又終ふ  
一 當寺は本寺安んず如也然いそ如く  
念ふと号や一修家入寺ありとて寺は  
法陀志も後おとまりけ来由とて又終ふ  
はおうと終ひ僧僧と語り終ふ我々

初と推く念仏一經は佛とあり後には  
おまの法門一經ありとあり信持の  
て是と稱する其後法門と稱して  
けり依安の安也なりと稱して  
佛の法門又是と稱して佛の法門  
守る縁乃の縁佛と入へる縁也  
是よりよりけりよと稱して  
縁と稱して佛の縁と入へる縁也  
縁と稱して佛の縁と入へる縁也

一佛の縁と入へる縁也  
二人の縁と入へる縁也  
其志ありとありと是と異なり  
一佛の縁と入へる縁也  
わりの是を佛殿東求法殿空法殿の  
佛の縁と入へる縁也  
一佛の縁と入へる縁也  
縁と入へる縁也

右二水、龍山云乃伊姫君英彦院殿周  
養皇貞大姫正遊宮乃之御、  
降也、  
一、  
是ハ上人乃伊自、  
新水、  
一、  
之

と徳音入、  
是、  
右二水、  
一、  
の所、  
是、  
是、  
一、  
之

と徳音入、  
是、  
右二水、  
一、  
の所、  
是、  
是、  
一、  
之

と徳音入、  
是、  
右二水、  
一、  
の所、  
是、  
是、  
一、  
之

と徳音入、  
是、  
右二水、  
一、  
の所、  
是、  
是、  
一、  
之

と徳音入、  
是、  
右二水、  
一、  
の所、  
是、  
是、  
一、  
之

寺澤ふも乃なり

一休院 銀葉三首とてよ安河孫作

りり是を楠氏受戒とてよ志登家流

とてよ信男古家流とてよ也

右は外実家ありとてよ是と書と

六十一

河津寺の意言人阿比作 徳壽院

取々秘念のりとてよ入水と

六十二 河津寺安河孫の作 真教寺

河津寺の意言人阿比作 徳壽院

六十三 河津寺安河孫の作 雲林院

河津寺の意言人阿比作 徳壽院

六十四 河津寺の意言人阿比作 徳壽院

河津寺の意言人阿比作 徳壽院



多勢は親王乃所系あり是の長  
川氏明養隆文より所傳り  
多勢なり

七十九

所本多勢のころ也

安樂養

正々同村

所本多勢同村

西村寺

七十

正々同村

七十一

所本多勢のころ也

光念寺

所へと同村

一苗寺所本多勢を十六所漢唐經之社

あるは奥田氏徳養乃より所傳り

所もと也

一常念仏親乃是のりも多勢の地

院の條下子記





おもひよ一皮をきりてとさうよりの能  
 敬事終りぬ後代小類福ありと志らん  
 うまうち人白雲乃達判一神文鑑あり  
 らのる依の服んよおさるんさうさあり  
 けしよとけ神文是ありわくはさうま  
 こくにけさるるを修す母とさるる乃  
 其像るるに系結しとくはさうまあり  
 こり修應しととさうまありさうまあり

もりりり

七十五

百五文書

作はるる心乃作 長教守

あまふれのかみふまへ入るる所あり

